

対談

日本の水と食を護れ！



グローバルウォータ・ジャパン代表

吉村和就

人間は自然からの
しつぺ返しを受けている

吉村 きょうは食・農業の専門家である鈴木先生と対談できることを本当に嬉しく思います。と言いますのは、ご承知の通り、いま世界は大変な状況です。まず地球温暖化による旱魃^{かんばつ}と洪水が世界中で頻発^{ひんぱつ}し、それに比例するように、例えばアフリカでは食料危機が問題になっています。

また、本来であればたくさん水があるはずの南米アマゾンでも水不足が深刻になっていますし、「ヨ



東京大学大学院教授
鈴木宣弘

「ロツパの水^{みずがめ}瓶」と称されるスイスでは六十年ぶりの早魃^{かんが}ということで、ドナウ川などの国際河川の水位が下がり、灌漑^{かんがい}農業が半分にまで抑えられている状況です。

鈴木 いま吉村先生がおっしゃったように、水と食、あるいは水と農業というのは、とても密接に関わり合っていますね。世界的な水不足の要因にしても、気候変動に加えて、農業のやり方が大きく影響している。私たちは「緑の革命だ」「世界の飢餓^きを救うんだ」などと言って、化学肥料や化学農業を大量に使用した農業でどんどん収

いま気候変動や土壌汚染、紛争の勃発、人口増加などの影響により、世界的な水不足、食料危機が目の前に迫っていると言われている。それは貧しい発展途上国だけの問題ではなく、世界の経済大国であり、豊かな自然に囲まれた日本もまた例外ではない。それぞれ「水」と「食（農）」の問題に通暁するグローバルウォータ・ジャパン代表の吉村和就氏と東京大学大学院教授の鈴木宣弘氏に、日本が直面する危機、そして真に豊かな国・日本を取り戻す道筋を縦横に語り合っていた。

よしむら・かずなり——昭和23年秋田県生まれ。大学卒業後、企業勤務を経て、平成10年国連ニューヨーク本部、経済社会局、環境審議官に就任。17年グローバルウォータ・ジャパン設立代表に就任。著書に「水ビジネス110兆円水市場の攻防」（角川書店）「図解入門業界研究最新水ビジネスの動向とカラクリがよくわかる本」（秀和システム）など多数。

すずきのぶひろ——昭和33年三重県生まれ。57年東京大学農学部卒業、農林水産省、九州大学大学院教授を経て、平成18年東京大学大学院農学生命科学研究科教授。FTA産官学共同研究会委員、食料・農業・農村政策審議会委員、財務省関税・外国為替等審議会委員、経済産業省産業構造審議会委員、コーネル大学客員教授などを歴任。著書に「食の戦争」（文春新書）「農業消滅」（平凡社）「世界で最初に飢えるのは日本」（講談社）など。



降雨量の減少、熱波などの要因が重なって干上がった、フランス東部とスイス西部の自然な国境であるドゥー川の一部。2022年6月以降、ヨーロッパは3度目の熱波に見舞われるなど、異常気象が続いている ©AFP=時事

穫量を増やしてきましたが、結局それで何が起ってきたのか。

化学肥料・農薬の大量投入で植物が育つ土壌環境を整える微生物がどんどん減少し、植物も頑張っ
て根っこを生やさなくても肥料が
もらえるところで、根っこが短
くなっている。そうすると、今
度は植物を育てる力、保水力が土
壌から失われ、さらに大量の化学

肥料・農薬、水を投入しなければ
農業ができなくなったわけだ。

実際、現在の世界の水使用量の約
七割は農業に使われています。

アメリカ中西部の穀倉地帯でも、
これまで地下水を汲み上げて農業
生産をやってきたけれども、あと
十年、二十年も待たず地下水が枯
渇するという予測もあります。

吉村 ええ、アメリカでは、八つ
の州にまたがるオガララ帯水層と
いう世界最大の地下水帯が枯渇の
危機に直面しています。鈴木先生
もお詳しいと思いますが、どんど
ん地下水を汲み上げていくと、最
後はどうなるかといえば、水の量
が減るだけではないんですね。同
時に土壌の塩化が始まり、植物が
育たなくなってしまうんです。

アメリカに関してもう一つ深刻
なのは、シェールガス革命の影響
です。オガララ帯水層の周辺は最
大のシェールガスの採掘地なので
すが、シェールガスはどのように
採るかというところ、まず地下を垂直
に二千メートル掘り、今度は水平
に千メートル掘る。そして粘土岩
のようなシェール層に水圧をかけ
てパカッと割って、そこに付着す
るメタンガスや油を採っていくま

す。

ところが、地中深く掘っていく
ためには潤滑剤などの薬剤を使用
しなくてはなりません。それが
漏れ出してオガララ帯水層を汚染
していることが分かったんです。

いまアメリカ合衆国環境保護庁
(EPA) が大騒ぎしています。

アメリカは先端科学の国だと日
本人は思っていますけれども、実
は広大な土地を使い、トウモロコ
シや大豆、小麦を大量生産する世
界最大の農業国です。ですから、
地下水の枯渇や汚染は、アメリカ
にとって非常に由々しき問題なん
です。

鈴木 水が足りないだけではなく、
質まで劣化している。汚染された
水で農業をやれば、農作物を通じ
て人間の健康にも影響してくるか
もしれません。大変な問題です。

そもそも、綺麗な水と肥沃な土、
太陽の光があれば、自然の循環の
中で、安心・安全な食べ物をたく
さん供給できたんです。それが化
学肥料や農薬を大量に使用した土
壌を痛めつけるような農業、もっ
とえば、一部のグローバル企業
が儲かるような大量生産・大量消
費の大規模農業を追求していった

ことで、水不足や食料危機を招い
ている。「いまだけ、金だけ、自分
だけ」の目先の利益に走ってきた
“しっぺ返し”を受けているのが、
いまの状況であると思います。

日本にも迫りくる 水不足の危機

吉村 二〇二三年三月、ニューヨ
ークの国連本部で「二〇二三年国
連水会議」が開催されました。私
も日本の地下水について話をし
てきたのですが、グテーレス国連事
務総長が「地球はいま沸騰してい
る」という言葉を使っておりました。
それほどこい地球温暖化、気
候変動は深刻になっているという
ことです。

そして、このままでは二〇三〇
年には世界人口の約半分、実に約
四十億人もの人々が、日常生活に
不便を感じる「水ストレス」の状
態に見舞われると予測されていま
す。自国に水源があり、それを安
心・安全に利用できる国は、国連
加盟国百九十三か国のうち日本を
含めて僅か二十か国しかありま
せん。ですから、いま世界の大半
の国は、多國間を流れる国際河川
の水源を巡って激しい水の争奪戦

を余儀なくされているんです。

もちろん、豊かな水資源に恵まれている日本も例外ではありません。日本の水資源の約三割は、梅雨と台風、積雪によって賄われてきました。しかし地球温暖化の影響で梅雨前線は日本列島に長く留まらなくなっていますし、台風の進路も無軌道になり、積雪はここ百年で約三割も減っています。何も手を打たなければ、いずれ日本も豊かな水資源に恵まれた国ではなくなってしまう可能性がある。

鈴木 日本にも水不足の危機が確実に迫ってきているのですね。

吉村 しかし、日本人は政治家を含め、水を巡る世界の状況に非常に疎く、水を護ろうとする意識に乏しい。『水ボケ』状態に陥っています。例えば、日本が早急に手を打たなければならない問題の一つが、水インフラの老朽化です。

日本の上下水道は昭和三十年代の高度経済成長期に、全国にパン敷設されました。それがいま還暦を越えて老朽化し、年間約二万件の漏水事故が起こっているんです。また数年前には和歌山市の六十谷水管橋が崩落するなど、被害は年々深刻になっています。

それなら早く修理、リニューアルすればいいじゃないかと思われるかもしれませんが、当時の設備をつくり、その技術とノウハウを持った団塊の世代が一齐に定年退職を迎えてしまったために、難しくなっているんです。さらに、いま日本では毎年八十万人も人が減っていくという急激な人口減少が起こっていますから、それに伴い水の使用量も減って、水道事業者にお金が入らなくなっています。

要するに、「ヒト・モノ・カネ」の三つが同時に失われていく三重苦に直面しているのが日本の水インフラの現実なんです。これは農業用水路も同じで、老朽化しているのにリニューアルできず、多くの設備が水漏れを起こしています。**鈴木** ええ、農業用水路の劣化も深刻です。

吉村 また、水インフラの劣化は国防にも関わります。国内百六十か所に及ぶ自衛隊駐屯地は、水道や下水道などを地元の市町村に依存しています。ウクライナ紛争で分かったように、地域のインフラが攻撃を受ければ軍隊は身動きが取れなくなってしまうんですね。ですから、日本の水を護るため

にも、国家の安全保障のためにも、私は水道料金を値上げし、早急に水インフラを強靱化していくことが必要だと提言しているんです。

崩壊の危機にある日本の農業

鈴木 水と同じく、食に関しても日本は非常に厳しい状況に直面しています。気候変動によって世界的に食料供給が不安定化していることに加え、世界の人口が増えていることで需要もどんどん増えています。特に、経済力をつけた中国が食料や家畜の飼料になる穀物などを高価格かつ大量に買いつけていることで、日本が主導権を持つて必要なものを必要だけ買える時代は完全に終わりました。

さらにそこに止めを刺す形でウクライナ紛争が勃発。また、ウクライナ紛争の収束の目途が立たないうちに中東危機まで重なり、ますます食料や飼料を買いつづけるのが難しい状況になっています。**吉村** まさに三重、四重苦ですね。**鈴木** 中でも深刻なのは化学肥料の不足です。日本はもとと化学肥料の製造に不可欠なリン、カリウムを百%、尿素は九十六%輸入

に頼っているのですが、主な輸入先の中国が自国需要を優先して売ってくれなくなって困っていたところに、リン鉱石の主な輸入元であるロシアやベラルーシとウクライナ紛争で敵対する立場になり、売ってもらえなくなりました。そうして家畜の餌と肥料の価格は二倍に跳ね上がり、おまけに燃料価格も高騰していますから、ものすごい勢いで日本の農家は疲弊し、ばたばた倒れていっています。

そもそも、日本の農家の平均年齢は二〇二二年の段階で六十八・四歳です。これがあと十年すればどうなりますか。農業の担い手がいなくなり、日本の農業が崩壊することは目に見えていますよ。

また、日本の食料自給率は戦後一貫して下がり続け、二〇二二年に先進国の中で最低の約三十八%（カロリーベース）にまで落ち込んでいます。ただし、農作物を育てる上で必要な肥料や種の自給率の低さも考慮すると、三十八%という日本の食料自給率は実質的に十%あるかないかでしょう。この状況を放置すれば、日本国内で食べられるものが十分に確保できなくなり、最悪の場合、国民が飢え死にする

可能性さえあります。

吉村 国民の食料と水が確保できない時が早晚やってくる。日本の食と水は本場に危機的状況で、まさに“背水の陣”なのです。

日本の食を破壊した アメリカの洗脳政策

鈴木 いま食料自給率について触れましたが、そもそもなぜ日本の自給率はここまで低くなってしまったのか。その原因は戦後のアメリカの占領政策にあるんです。

朝鮮戦争後、戦争に備えて増産してきた農作物の供給先を失ったアメリカは、大量の在庫を抱えてしまいました。そこで日本の大豆やトウモロコシ、小麦の関税を撤廃させて、在庫の捌け口、処分場にしたんです。この三品目の国内生産は壊滅的打撃を受け、その影響は今日にまで及んでいます。

アメリカはその際、米を食べていると小麦を日本人の胃袋に押し込むことができないからと、慶應大学医学部教授に、「米を食べると馬鹿になる」という科学的根拠のない本を書かせて流布させました。また、学校給食にパンを導入させたり、肉食化キャンペーンを展開

したりして、日本の食文化を世界でも例のないほど短期間でアメリカの都合のいいように改変しました。まさに食の洗脳政策です。

さらに、アメリカは日本の優秀な若者に奨学金を支給して自国の大学に留学させ、市場原理主義経済を徹底的に教え込みました。そうして学位を取った人材が戻ってきて、霞が関で規制撤廃と貿易自由化を推進。日本人は自由化すれば皆が利益を得られると信じて邁進したけれども、市場原理主義経済とは、実際には欧米のグローバル企業が日本から収奪するのに都合のよい経済学だったのです。

かくして日本はアメリカ、グローバル企業が儲けるのに都合のよい市場となり、輸入食料に頼らなければいけない状況に追いやられてしまったというわけです。

吉村 鈴木先生のお話を聞いていて、子供の頃、学校の給食でおいしくないアメリカの脱脂粉乳と小麦のコッペパンばかり食べさせられたことを思い出しました。それでも食べ物がなかったので喜んで食べていましたけれども……。日本を占領したGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）のマッカーサ

ー元帥は、（戦後の貧しい）日本を助けたんだと偉そうに言っていますが、鈴木先生がおっしゃったように、実際は日本を余剰在庫の処分先にしていたわけですね。

鈴木 私も小麦のパンがまずくて仕方がなく、机の奥に突っ込んでカビを生やしてしまい、よく先生に怒られました。脱脂粉乳の味も本当に酷かったですね……。あれは、船で運んでくる時に品質がかなり劣化していたようです。

ですから、いまも古くなっているもの、危ないものは日本へ売っておけというのが、合言葉になっていくわけです。例えば、成長ホルモンのエストロゲンは乳がんの増殖因子になることが医学界では常識になっていて、国内では使用することができません。ところが、エストロゲンを大量に投与した一部のアメリカ産の食肉を、日本は実質的に検査をさるがにして輸入させられているんです。

してエストロゲンを使用し続けている農家が一定数います。しかしEUはホルモン牛肉の輸入を全面禁止していますから、「じゃあ日本人に食べさせておけ」と捌け口にされているのです。人間に中毒症状を引き起こす成長促進剤を使用した食肉についても同様です。

そのようなリスクがあるにも拘らず、二〇二〇年の日米貿易協定によってアメリカ産牛肉の輸入関税が引き下げられると、日本の消費者は安いからと言って飛びつき、協定が発効した最初の一か月だけでアメリカ産牛肉の消費量が一・五倍になったんですよ。

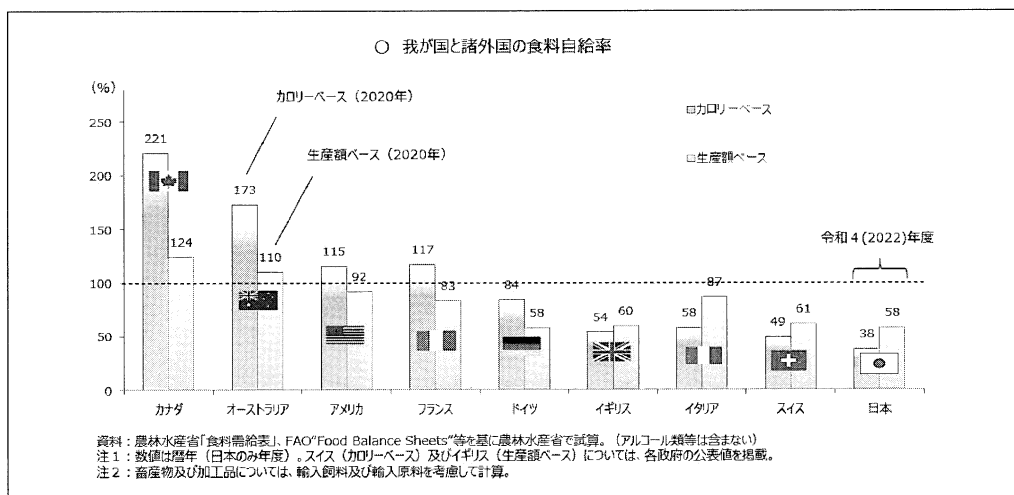
食品リスクについてもっと言えば、最近はいまだ十分に安全性の確保されていないゲノム編集という技術で生産されたトマトが、審査も表示もされないまま日本の市場に回り始めています。

日本人は自分が食べている食品がどのようなものなのか、もっと関心を持たなければなりません。

日本の水源地が 外国資本に買われている

吉村 水インフラの劣化に加えて、いま問題になっているのは、外国

世界の食料自給率。日本の食料自給率は、諸外国と比較すると、カロリーベース生産額ベースともに低い水準にある（出典 農林水産省ホームページ）



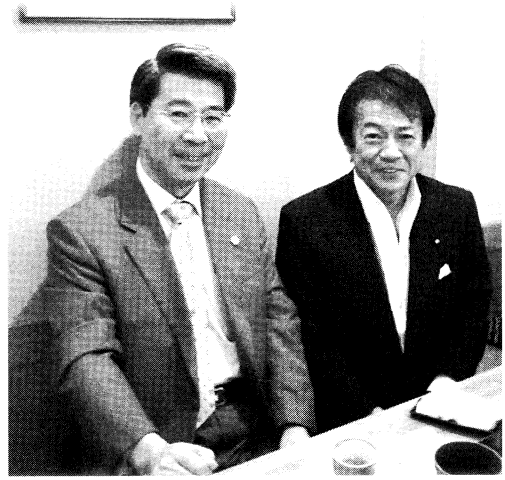
資本によって日本の水源地がほとんど買い占められているというところです。例えば、北海道のニセコや富士山周辺、熊本のア蘇山の麓などの水源地が外国資本によってかなり買い占められていると。鈴木 これも早く手を打たなければ、大変なことになりますね。吉村 ただ、最初は外国人ではなく、日本人の代理人が来て契約をするケースが多く、売主もまさか外国人が買っているとは分からないわけです。実際、あるテレビ番組で水源地の買主をずっと追求していったことがあるのですが、最後はシンガポールに行き着きました。買主にインタビューをしたところ、「自分は投資目的で買っているんだ」と言っていましたね。特に中国では個人に土地の所有権はありませんから、裕福な中国人は、日本の土地を持っていることが最高のステータスになるわけです。ただ、投資目的とはいえ、貴重な水源地が外国資本に買い占められるというのは由々しき事態ですから、何とかしなければいけないのですが、実は、日本には山林や水源地を外国人が買っているいけないという法律がないんですよ。

鈴木 本当におかしな状況です。吉村 しかも日本の民法は「私の権利」があまりにも強すぎ、日本人・外国人問わず、土地を買ったらそこにある山林も地下水も全部その人の所有になってしまう。一方アメリカでは、安全保障の観点から外国資本による土地の買収を大統領令によって差し止めることができるんです。歴史的に他国との紛争が多いヨーロッパ諸国も、国土と水に関する権利はものすごく厳密に決まっています。鈴木 やはり欧米はそのあたりは非常にしっかりしていますよ。吉村 このままではいけないと、二〇一四年に「水循環基本法」が出来上がったのですが、これは理念であって罰則規定がなかったんですね。そのため、政府は最近になって特定地域を保護する「重要土地利用規制法」を定めました。ところが、特定地域の対象として最終的に残ったのは自衛隊の基地周辺や一部の離島、原子力発電所などで、入る予定だった水源地は全部除外されてしまいました。水の専門家としては痛恨の極みです。ですから、日本はいまだに誰でも水源地を買うことのできる、世

界でも異常な状態になっているんです。一日も早くこの状態を解消していかなくてはなりません。

**日本を売り飛ばす
日本人の売国行為**

鈴木 いま吉村先生がおっしゃったことは、農地でも同じです。水源地が外国資本に買われている中で、いま何が起きているかというと、民間企業が農地を買える仕組みがどんどん整えられていっているんですね。これだけ農業が厳しい状況になれば、農家も高く買ってくれる人に農地を売りたいと思うようになります。その農地をまず日本企業が買い、それを日本では考えられない価格で買ってくれる人たちに転売するということが起こっているんです。そして水源地と同様に、農地を購入した人を辿っていくと、日本人じゃない人や企業に繋がっていく。もちろん、農地を買っている日本企業の全部がそうではありませんが、自分だけでも、「いまだに、金だけのために農地を外国資本に売り飛ばす」というのは売国行為そのものです。実際、土地一帯が外国資本に



買われてしまい、その地域はまるで別の国のようになってしまっているという例も出てきています。

吉村 日本なのに日本ではなくなくてしまっている。

鈴木 もう一つ懸念すべきなのは、農地だけではなく漁業権も民間企業が買えるようになりつつあるということです。これまでは漁業組合に優先的に漁業権が付与されることになっていたのですが、二〇一八年の漁業法改正でそれが廃止され、民間企業にも付与されることになりました。そして、今度は漁業権の売買を可能にするような動きが出てきています。水源池や農地と同じように、そこに日本に

敵対する意図を持った勢力と繋がりのある外国資本が入ってきて、漁業権を買っていくとどうなるか。日本は自国の海の安全確保、制海権を失うことになりかねません。

まして、外国資本が所有する日本の農地、海で獲れた農作物や海産物を優先的に自国に持つていくというような事態になれば、日本の食の安全保障はさらに危機的な状況に陥ってしまうでしょう。実際、海外には日本の安心・安全でおいしい農産物や海産物を欲しがっている人たちがたくさんいますから、この問題はもっと日本全体で深刻に考え、歯止めをかけていかないと大変な事態になります。

戦国武將は 治水の神様だった

吉村 では、これから日本はこの厳しい状況をどう乗り越えればよいかということですが、一つの処方箋としては、一度使ったものを再利用していくことでしょう。

先ほど鈴木先生が肥料の自給率の話をされましたけれども、特にリンに関しては値段が上がっていて、日本はお金があっても買えない状況にある。しかし、その中で

いま国内に残っているリンを回収してもう一度使っていこうという動きが出てきているわけです。

人間は一日一グラムのリンを排泄物と共に排出しているとされていますから、日本全体でだいたい一日二万トンのリンが下水道を通じて海に流れています。そのため、下水汚泥からリンを回収して農業に役立てようというプロジェクトが、国土交通省や農林水産省も関わって進められ、既に神戸市では「神戸リンプロジェクト」として実施されています。

鈴木 素晴らしいプロジェクトですね。リンやカリウムなどの様々な資源はあと何十年もつかという状況ですから、原点に返ると言いますか、なるべく自然の力を活用する方法で、一度使ったものを再利用していく、循環させていくことがとても重要だと思います。

吉村 原点に返る、ということでは、やはり地元にある資源をうまく活用することで、海外に依存しなくてもそこに住んでいる人々に雇用が生まれ、お金がしっかりと入ってくる仕組みをきちんと創っていくことも必要でしょう。要するにいままでいう地方創生です。

その地方創生を徹底的にやったのが、実は戦国大名なんです。例えば、加藤清正は現在の熊本中部を流れる白川が度々氾濫し、農民を苦しめていたのを見、徹底的に白川の河川改修をやりました。しかも同時に農地、水田も整備したので、そこで穫れたお米などの農作物が全部お金になりました。

それから武田信玄は、信玄堤という独自の堤防を築き、暴れ川と称された笛吹川や釜無川の治水に力を尽くしました。信玄がすごいのは、堤防のいか所だけ水が漏れるようにしておき、洪水が起った際にそこが遊水地になるようにしていたことです。そして洪水が引いた後は農業用地(または畑地)や水田として活用したんですね。

徳川家康も利根川の流れを江戸から千葉の銚子の方向に変えることによって(利根川の東遷、水害の絶えなかった関東平野、江戸を守り発展させると共に、用水路を整備して千葉の農地や新田開発も行いました。

ですから、当時の優れた戦国武將たちは皆、水を通じて領国を治めた「治水の神様」だったと言えるでしょうし、「水を制する者は国

家を制する」と言われる所以もここに
あるんです。

江戸時代の日本はSDGs先進国

鈴木 戦国武将もそうですが、日本人の知恵には本当にすごいものがありましたね。例えば、江戸時代の日本は鎖国をしていましたけれども、それぞれの地域には水田や山里を中心とした伝統的な共同体があり、その中で農作物や家畜を皆で生産し、地産地消すると共に、様々な資源を再利用する循環社会をつくり上げていました。江戸時代の日本は世界に冠たるSDGsのリーダーだったんです。

吉村 ええ、まさに江戸時代の日本はSDGs先進国でした。私も世界でSDGsが言われ始めた頃、国連で「皆さん、偉そうなことを言っておりますが、三百年前の日本の江戸では、百万人の人たちが既にSDGsを実践して持続可能な社会をつくっております」とスピーチしたことがあります。

では日本は具体的にどんなことをしていたのか？と聞かれましたから、例えば、江戸では人間の排泄物まで肥料（金肥）として、

しかもウイルスや病原菌を殺すために必ず寝かせて十分高温発酵させてから活用していましたが、というのを伝えたいです。それに衣服も着られなくなったものは雑巾に、雑巾も最後は燃やして灰にして、灰もまた肥料として使っていました。そこまで徹底して資源を循環させていたのが江戸時代の日本です。

鈴木 こうした事実をもっと学校などで教えていくべきですね。

吉村 とはいえ、もう一度江戸時代の生活に戻れと言っても無理ですから、先人たちの知恵を生かしつつ、現代のIT、人工知能などの最新技術を治水なり、農業なりに活用して、かつての江戸のような循環型社会、地方創生を実現していくことが必要だと思います。

鈴木 おっしゃる通りで、本来はその土地で穫れたものはその土地に住む人たちで食べ、活用していくことが健康にも環境にも一番いいんですよ。そしてその地域ごとの共同体、人と人のネットワークがしっかりしていれば、自分たちだけ儲けようとする人やグローバル企業がやってきたって容易に入れないわけです。最新の科学技術

も活用しながら、日本古来の共同体や循環型社会のあり方を取り戻していく。それが豊かで幸せな日本を実現していく道だと思います。

日本のために闘う 国士がいま求められる

吉村 私はいま縦割りの省庁をまたぐ形でいかに日本の水循環をよくするか、国会議員や行政に提言しているのですが、ようやく二〇二四年四月から、これまで厚生労働省が管轄していた水道事業が、ダムや河川等の水行政全般を管轄する国土交通省に移るんです。

これにより上流に降った雨をダムに貯め、それを水道で使い、最後は下水道で以て海に流す、あるいは水の再利用……という水循環が一つの省庁で監督できるようになりました。しかし、法律も制度も異なっていたものがいきなり一緒になってもすぐにはうまくいきません。もちろん、いろんな利権もあります。それを大所高所から長期的・戦略的な思考を持ってファシリテートしていくのが政治家に求められる能力であり、役割であると思うのですが、いまは二世、三世議員ばかりになって、日本を

これからどういう国にしていくなか、立国立国の思いを持って本気で行動するリーダーがほとんどいなくなっている。これが日本の一番の問題なのかもしれません。

鈴木 おっしゃる通りですね。

吉村 私がこれまで接した政治家の中で最も気骨があり、最も水の重要性を理解していたのはやはり中川昭一先生です。私は中川先生の要請を受け、二〇〇七年から自民党本部で五十三回にわたる勉強会に携わりました。しかし、中川先生は二〇〇九年に急逝されてしまった……。「自分はこれから水大臣をやりたい」とおっしゃっていただけに、本当に惜しい方を亡くしたと無念でなりません。中川先生の写真は、いまもお守りのように胸ポケットに入れてあります。

鈴木 私も中川先生には大変お世話になりました。中川先生は農林水産大臣の時、周囲の反対を押し切り、余剰生乳を加工した脱脂粉乳の在庫を海外援助に使ったんですね。これはアメリカの市場を奪い逆鱗に触れる可能性があったのですが、中川先生は日本の国益を考えて実行したのです。まさに中川先生は「アメリカにも言うべき

ことは言う「真の国士^{こくし}でした。現在もコロナ禍^かの影響により米や乳製品の在庫が増え、価格が下がっている半面、先に述べたように様々なコストが上がって日本の農家は瀕死^{ひんし}の状態にあります。本来であれば政府は輸入を減らすと共に、それらの在庫を買い取って国内農業を支える、あるいは海外援助に使わなければいけません。



しかし多くの政治家は何に怯^{おそ}えているのか、そこに踏み込むことができないのです。吉村先生がおっしゃったように、自らが盾^{たて}になっても日本の食を護ろう、国民を護ろうという立志立国の政治家が少なくなっているんですね。

ですから、まず私たち一人ひとりが立志を持ち、中川先生のような国士が現れれば、団結して応援していく必要があります。一人の力ではだめでも、皆で面になって闘っていけば日本の危機的状況も突破していけると信じています。

すべては一人ひとりの 立志から始まる

吉村 おっしゃる通りで、最終的によりよい国や社会をつくっていくのは一人ひとりの立志です。

私が水を専門とする仕事に携わるようになった原点にも、立志がありました。私は秋田市の生まれですけれども、実家の後ろに旭川という日本海から鮭^{さけ}や鱒^{ます}が遡上^{そじょう}してくる綺麗な川がありましてね。子供の頃はその旭川で魚を獲るのが楽しかったんです。

ところが、高度成長期になると周囲に住宅地や工場ができ、旭川

は汚れ、遊ぶことができなくなりました。それで昔の美しい旭川を取り戻したいとの志を立て、中学では理科クラブに入り、高校や大学でも化学を学んだわけです。

その後、企業に勤めても国連の仕事をするようになって、立志を原点に排水処理や設計、機器の試運転、原子力の除染など、水に関わることなら何でも一所懸命に勉強して取り組んできました。

それがいまの水に関するアドバイザーなどの仕事にものごく役に立っています。「自分で身につけたものは、裸になっても役に立つ」が私の信条。ですから、特にいまの若い人はスマホに頼ってばかりいないで、自分なりの立志を持ち、その実現のために自分の頭で考えて勉強し、自分から体験して、志を同じくする仲間を集めて、日本のため、さらには世界のために活躍してほしいと願っています。

鈴木 私も英虞湾を望む自然豊かな三重県志摩半島南部で、半農半漁を営む家に生まれました。子供の頃から田植えや稲刈り、野菜づくりや牡蠣^{かき}・海苔^{のり}の養殖など、すべて自分で体験してきました。それがだんだん開発が進んでき

て、豊かな自然が企業の利益のために潰^{つぶ}されていきました。その光景を見て子供ながらに日本はこのままでは危ない、何とかしたいという志が臍^{へそ}気ながら芽生えて、結果的に現在の食や農業問題を研究する道に進んだんです。

吉村 原点はお互い同じですね。

鈴木 ただ、個人として高い志を持っている人でも、大きな組織などで働くとなったら、いつの間にか「いまだけ、金だけ、自分だけ」の目の利益追求のために行動するようになってしまいます。

ですから、どのような立場にあっても常に自分の胸に手を当てて、いまやっていることは本当に正しいことなのか、人間としていかに生きるべきなのかを問い掛け、行動を変えていく。それが皆が楽しく幸せに暮らしていける豊かな日本、子供たちの明るい未来へ繋がっていくのだと思います。

吉村先生、本日は貴重な機会をありがとうございます。

吉村 こちらこそ、あつという間の二時間でした。これから水と食、それぞれの分野で日本のためにお互いに頑張っていきましょう。